

お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp
Museum News

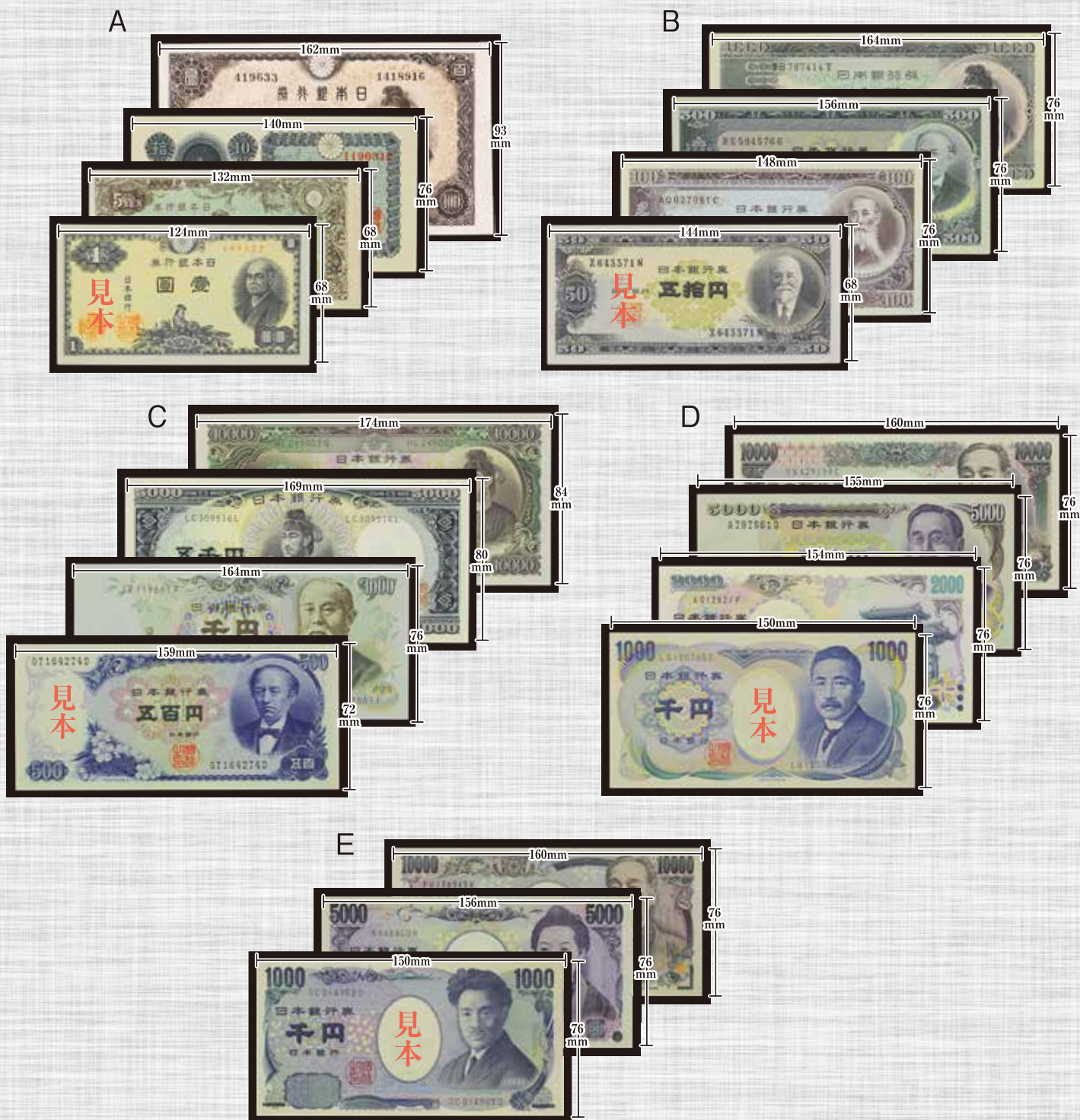
Contents

令和2年度第1回特別展「世界のお札を比べてみれば」より
日本のお札を比べてみれば—大きさと額面の移り変わり—

展覧会追録

令和2年度秋の特集展
「富士山 お札・切手・旅券に描かれた日本の象徴」より
外国切手に描かれた浮世絵と日本

2020/12/1
Vol. **47**





令和2年度第1回特別展「世界のお札を比べてみれば」より
日本のお札を比べてみれば
 -大きさと額面の移り変わり-

令和2年8月4日(火)から8月23日(日)まで、令和2年度第1回特別展「世界のお札を比べてみれば」を開催しました。本年は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、展示期間を短縮し、例年併設しているイベント「手すきはがき体験」も中止とせざるを得ない状況となりましたが、夏休み期間中ということもあり、多くの方々にご来館いただきました。

現在使われているお札の 大きさと額面の傾向

本展示の内容は、大きさ・額面・素材というお札の構成要素について世界のお札を調査・比較し、その結果から現在のお札の傾向や特徴をご紹介するというものでした。本展示で取り上げた各要素は、お札の機能や利便性に密接に関わるものであることから、各国の社会・経済情勢(お札を利用する環境要因)に大きく影響を受けるものであるということがいえます。

調査対象は外務省が定める196か国と5の地域(北極・南極を除く)の計201の国と地域としました。お札の大きさを調べたところ、全ての額面のお札の大きさが同じ国とお札の縦の長さが共通している国が多くを占めていることが分かりました(図1)。日本はというと、縦の長さが共通している国に含まれます。一方、お札の券種を調べると6券種のお札を扱う国が一番多く、次いで5券種となっています。日本は4券種であることから、世界の中で最少券種を扱う国ということが分かります(図2)。

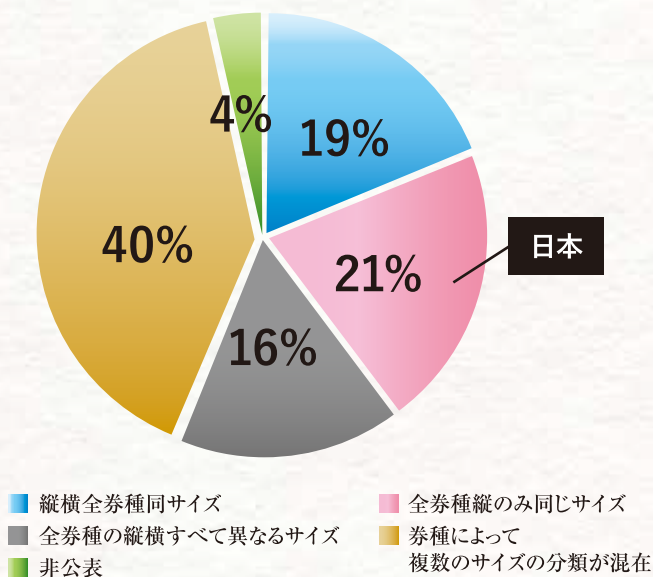


図1 世界のお札のサイズ分布

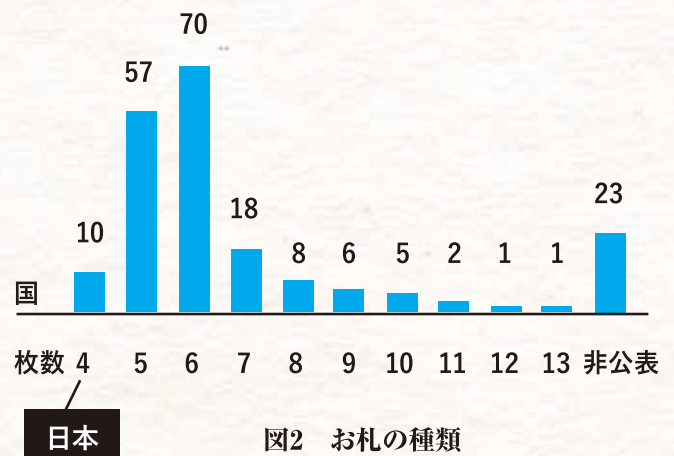


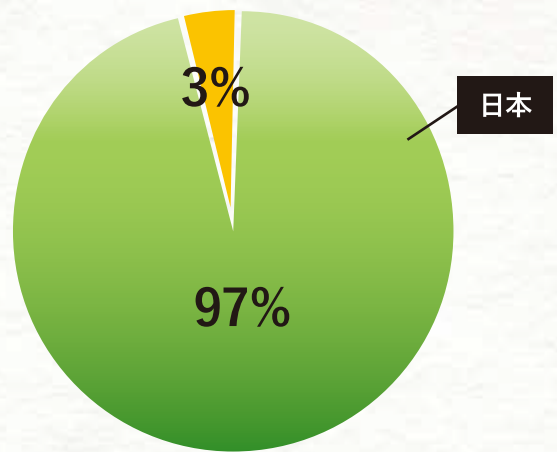
図2 お札の種類

注: 図1~3のデータは2020年7月時点の各国中央銀行ホームページの公表情報を元に作成。

また、額面数字に注目すると、世界では2のつく額面を使う国が圧倒的多数を占めており(図3)、日本も平成12(2000)年に発行された2000円をもってこの国々の中に含まれています。

このように、日本のお札は世界で使われているお札と比べてお札の種類においては少ないものの、そのほかは足並みを揃えていると言えます。

以降、現在に至る日本のお札の大きさと額面の移り変わりを振り返ります。



■ 2のつく額面を使う国 ■ 2のつく額面を使わない国

図3 2のつく額面のお札を使う国

日本のお札の大きさの移り変わり

日本のお札が現在のように横長になったのは、明治6(1873)年発行の国立銀行紙幣からです*1。

このお札は、製造をアメリカに委託したため、アメリカのお札と同様に全ての券種が同じ大きさとなっています。その後国産化されたお札は、高額面から徐々に寸法が小さくなっていくという仕様であるものの、寸法の統一に欠け、取扱いも不便ということから、昭和2(1927)年の兌換銀行整理法に伴う新銀行券の発行を機に寸法の統一が図られました。それは、最高額面の100円を基準として、額面が小さくなるに従い縦横の寸法を相似形に小さくするというもので、縦と横の比が57:100、縦と対角線の比が1:2となるように定められました。この比率の設定は、お札が数えやすく取扱いやすい、そして、デザイン的にも美しいということによるものです。この取決めはその後のお札の型に適用されました。ただし、関東大震災や金融恐慌などの非常時においては、すでに作成されている原版を一部転用してお札を製造していました。戦時下の昭和20年には、用紙の節約と印刷の効率化のために小額券と高額券の縦寸法を統一し、印刷用紙の規格化が図られました。この規格は、戦後の新円切り替えの際に緊急発行された日本銀行券Aシリーズにも適用されています。続いて発行されたBシリーズは、製造能率向上のために50円以外は縦寸法を統一し、8mmずつ異なる横寸法が決められました。昭和32・33年発行のCシリーズでは、高度経済成長に伴い1万円と5000円という高額券が新たに発行されることになりました。その寸法は、1万円を最大として縦横の寸法を小さくするという規格となっています。そして、昭

和59年に発行されたDシリーズは縦寸法を76mmで統一し、各券種の横寸法を5mmずつ異なるものとしていましたが、平成12(2000)年に2000円の発行によって、2000円と5000円との横幅が僅差となりました。現在のお札であるEシリーズは、5000円の横寸法を156mmとし、2000円との差を広げています。

このように戦後のお札の寸法は、おおむね昭和2年の取決めに基づいており、基本的には扱いやすさや美しさを考慮したものでしたが、戦争などの非常時を機に製造効率の観点加わり、縦寸法の統一が図られます。この縦寸法の統一は、昭和40年代から急速に普及したATMや自動販売機に対応させるため現在も継続して採用されています。さらに、省資源のために小型化されたほか、近年ユニバーサルデザインに対する考え方が様々な分野に浸透し、お札の仕様においても利便性により配慮がなされるようになりました。現在のお札の券種別で異なる横寸法はそのうちのひとつとして券種識別の役目を担っています。

*1 明治5年に横浜為替会社が発行したお札も横長ですが、交易用で使用が限定されたお札であるため、例外としています。

日本のお札の額面の移り変わり

通貨は、現金支払いの場合に計算がしやすく、かつ支払う通貨の量が最小で済むのが望ましいとされており、それを考慮して額面の設定がなされています。お札の場合は、日本銀行法施行令(平成9年政令第385号)により1000・2000・5000・1万円の4種と定められています。

時代を遡ると、明治時代の額面は1・5・10・100円を

基本とした4券種が発行されていました*2。大正時代に入ると、20円が新しい券種として加わった後、非常時用としてさらに200円と1000円が発行されます。そして、戦後の新円切り替え時に再び1・5・10・100円の4券種に戻り、昭和25・26(1950・51)年に発行された日本銀行券Bシリーズでは、物価水準の高騰から1・5・10円が硬貨に代わる一方で、50・500・1000円が新たに発行され、引き続き4券種が使われました。昭和30年に50円が、その2年後に100円が硬貨となるなか、次のCシリーズでは、高度経済成長により初めての10000円と5000円が発行されることとなりました。そして、昭和57年に500円が硬貨となったことでお札の券種が3券種に減りますが、2000円の発行で再び4券種に戻り現在に至っています。このように物価水準によって額面の切り替わりを伴いながらも、おおむね4券種が維持されてきたことが分かります。

日本において2のつく額面のお札は、江戸時代からすでにあり、明治時代においても、政府紙幣や国立銀行紙幣に見られます。日本銀行券においても、大正6(1917)年に発行された甲20円を始めとする5券種が発行(未発行を含めると6券種)されており、2のつくお札は

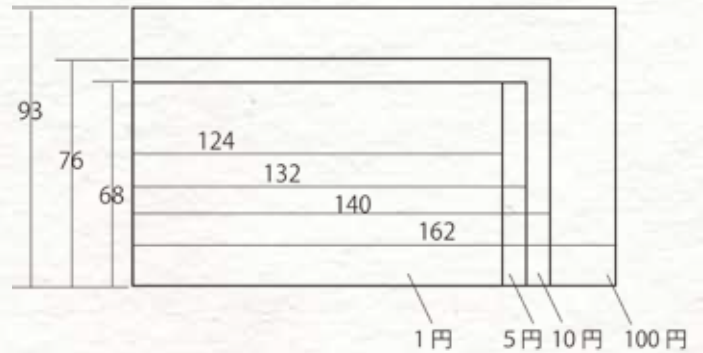
そう珍しいものではありませんでした。しかし、それはいずれも昭和21年に通用停止となっており、2000円の登場まで戦後50年余りの空白が生じています。現金支払いの際の利便性を向上させるために発行されたものの、流通枚数の少なさが示す通り、現在の日本人にとって馴染みの薄いものとなってしまっています。

(学芸員 松村記代子)

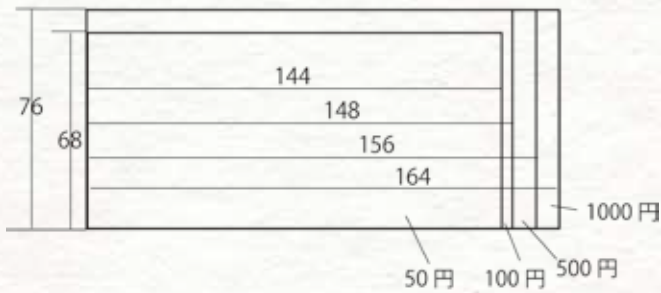
*2 ここでは日本銀行法に基づき発行されたお札(明治18年以降に発行されたお札)を対象とするほか、硬貨の代替として発行された小額紙幣は除きます。

【参考】戦後のお札の寸法

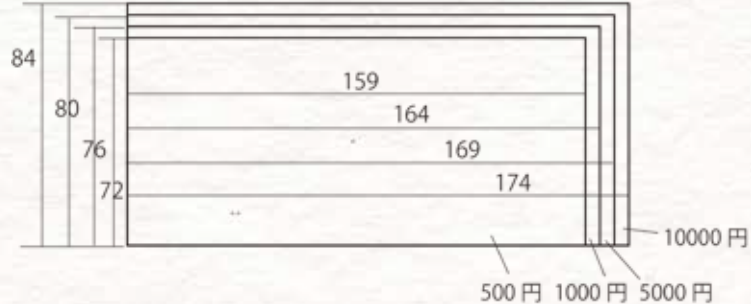
Aシリーズ



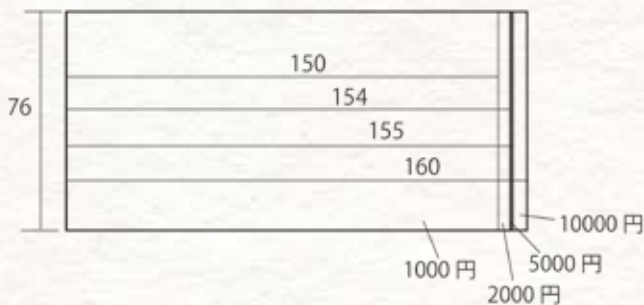
Bシリーズ



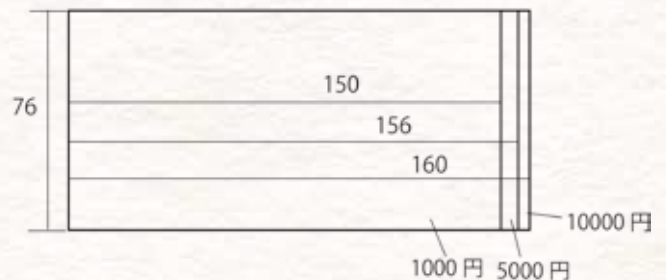
Cシリーズ



Dシリーズ



Eシリーズ





令和2年度 秋の特集展 「富士山 お札・切手・旅券に描かれた日本の象徴^{シンボル}」より

外国切手に描かれた浮世絵と日本

令和2年10月13日(火) から 11月29日(日) まで、秋の特集展「富士山～お札・切手・旅券に描かれた日本の象徴(シンボル)～」を開催しました。

同展では、日本最高峰の山であり、日本を象徴する山として多くの人々に親しまれている富士山をテーマに、富士山を図柄に用いたお札や切手、旅券、諸証券類を展示し、これらの製品に用いられている国立印刷局の技術や多種多様なデザインなどについて紹介しました。

展示では、日本の象徴として富士山を用いた外国切手を紹介しましたが、日本を表すモチーフは富士山以外にもあります。ここでは、それらの外国切手について、発行された時代背景などを中心にお伝えします。



展示風景より

日本の国際イベントと外国切手

1960～70年代にかけて、諸外国では、日本をテーマとした記念切手が集中的に発行されました。当時の日本は高度経済成長期にあり、東京オリンピック、大阪万博(日本万国博覧会)、札幌オリンピックといった国際イベントが相次いで開催されており、日本の国際的な地位が向上するに伴い、日本を取り上げる切手の数も増加していきました。

昭和39(1964)年に開催された東京オリンピックを記念する切手では、競技を描いたものなどが多く、日本をイメージさせる図柄はほとんどありませんでしたが、東京オリンピックが成功に終わ

り、日本が国際的に認められるようになると、昭和45(1970)年の大阪万博の開催時には、世界各国で日本を対象とした切手が発行されました。今回の展示で取り上げた富士山だけでなく、浮世絵を始めとした美術作品、伝統芸能や仏像(図1・2)、新幹線(図3)などが切手の図柄として幅広く採用されています。

なかでも、浮世絵を描いた切手は国内外の収集家の支持も高く、日本らしさや芸術性を表すものとして数多く発行されました。これは、中東のシャルジャ(アラブ首長国連邦を構成する首長国の一つ)の発行した切手(図4)が契機になったといわれています。



図1
ルワンダ 50セント
1970年



図2
アゼルバイジャン 1リアル、75ディルハム
1970年



図3
カタール 2リアル
1970年



図4
シャルジャ 1リアル
1966年

当初は日本以外で浮世絵の切手が受け入れられるか未知数な状況でもあったようですが、大蔵省印刷局(現国立印刷局)によって印刷されたこの切手が好評を博したことで、世界各国で浮世絵の切手が発行されるようになりました。

日本を描いた大阪万博の切手は、中東の国々によるものが目立ちます。特に、アラブ首長国連邦(UAE)を構成する7首長国である、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ラース・ル・ハイマ、フジャイラ、アジュマン、ウンム・アル・カイワインにおいては、国家が統合される前の1960~70年代に世界各国を題材とした多くの切手を発行しています。その数は、7首長国で8千種以上といわれており、日本に関するものだけでも年間数十種類の切手が発行されていました。

石油資源の豊富なアブダビや貿易港として発展したドバイを除き、これらの国々においては、めばしい産業が育っていなかったこともあり、国策として切手の輸出による外貨の獲得を目指しました。しかしながら、1972年にアラブ首長国連邦が結成されると郵便事業も統合され、各首長国で独自に切手を発行する

ことができなくなります。同年に開催された札幌オリンピックを記念する切手(図5)の数々は、その最後のものとなりました。

一方、中東の国々に限らず、植民地から解放されたアフリカ諸国(図6)や旧ソ連とともに社会主義国家であった東欧諸国などにおいても、国策として日本を題材とした切手を数多く発行しています。

中東の国々で発行された浮世絵切手は、日本の切手をそのまま流用したようなデザイン(図7)を多発するなど、質より量を優先して発行されたものがあることは否めませんが、チェコスロバキア(図8)やハンガリー(図9)など東欧諸国の切手は凹版彫刻の技術が高く、高品質の切手が発行されており、日本の浮世絵作品が精巧に再現されています。

大阪万博の切手で好評を博したハンガリーでは、さらに翌年、ブダペスト東アジア美術館の所蔵する浮世絵8種を集めた美術切手(図10)を発行しており、錦絵といわれる多色摺りの浮世絵を色鮮やかに表現しています。これらの切手もまた日本の収集家などを意識して発行されたものと考えられます。



図5
ウンム・アル・カイワイン
5リアル 1972年



図8
チェコスロバキア 3コルナ
1970年



図9
ハンガリー 2フォロント
1970年



図6
チャド共和国 0.5フラン
1970年



図7
ラース・ル・ハイマ
1.65リアル 1970年



図10
ハンガリー 60・40・1フォロント
1971年

日本の浮世絵切手の始まりと海外への影響

日本では、昭和21(1946)年に発行された普通切手(図11)において、浮世絵作品が初めて採用されました。終戦直後に発行されたため、目打ちも裏のりもありませんでしたが、戦後初めて文化的な図案を用いた記念すべき切手となりました。この図柄は、切手収集の趣味の普及を図ることを目的とした切手趣味週間の小型記念シート(図12)としても再発行されています。そして、昭和23(1948)年には、『見返り美人』(菱川師宣)を用いた切手(図13)が発行されるなど、浮世絵と切手の組み合わせが定着していきます。

また、昭和30(1955)年に発行された『ビードロ(ポッペン)を吹く娘』(喜多川歌麿)を採用したグラビア多色刷りの大型切手(図14)は、世界各国にも影響を及ぼし、フランスでは、さまざまな美術館の所蔵作品を紹介する美術切手(1961年～)が発行される契機になったともいわれられており、現在も続く人気のシリーズとなっています。

その後、世界の人々との文通促進を目的に発行された国

際文通週間において、『東海道五十三次』(図15)や『富嶽三十六景』(図16)をモチーフとした切手が発行されるなど、日本の浮世絵切手が好評を博したことで、国内だけでなく、美術切手を収集する海外のコレクターにも認知されるものとなりました。中東を始めとする世界の国々が数多くの浮世絵切手を発行したのは、こうした状況も背景にあります。

また、昨今のフランスでは、葛飾北斎の『神奈川沖浪裏』をモチーフとした切手(図17)が発行されており、その人気や知名度の高さが伺えます。この切手のように、日本の文化を表象するというよりは、世界的に著名な芸術作家の作品として浮世絵が採用された例もあります。

このように、日本を表現する代表的な芸術作品として数多くの浮世絵が切手の図柄に用いられており、浮世絵は日本という国を表すモチーフの一つとして諸外国においても広く受け入れられています。

(学芸員 佐藤さおり)



図11 新昭和切手 1円
昭和21(1946)年
*葛飾北斎『富嶽三十六景 山下白雨』をモチーフとしている。

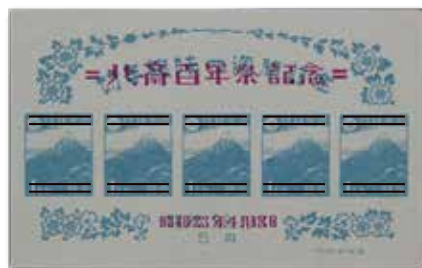


図12 北斎100年祭記念(小型シート)
昭和23(1948)年
*前年に「趣味の週間記念」シートとして発行されたものに「北斎100年祭記念」の文字を加刷して再発行したもの。



図13
切手趣味週間 5円
昭和23(1948)年



図14
切手趣味週間 10円
昭和30(1955)年



図15
国際文通週間 24円
昭和33(1958)年



図16
国際文通週間 50円
昭和42(1967)年



図17
フランス 1.9ユーロ
2015年

COMING SOON!
展覧会予告

令和2年度第2回特別展

加藤倉吉

最も多くの「顔」を彫り上げた男



上左: 第1次昭和切手 2銭
昭和12(1937)年
上右: 日本銀行兌換券 丙10円
昭和5(1930)年
中左: 小額政府紙幣 50銭
昭和13(1938)年
中右: 文化人切手 8円
昭和24(1949)年
下: 凹版画「子爵斎藤実像」
昭和9(1934)年

加藤倉吉は、大正から昭和にかけて、お札や切手の原版彫刻に腕を振るった印刷局の工芸官(専門職員)です。

戦時中の印刷局では、日本国内のお札や切手、諸証券だけでなく、戦地で使用するための多種多様なお札や切手、諸証券等を製造する任務がありました。この時、倉吉は確かな技術と驚異的なスピードで膨大な数の原版彫刻をこなし、時代の要請に応えました。一方、在職中から退職後まで、さまざまな製版技法や表現方法を研究、模索し、同時代の政治家や文化人等の肖像画のほか、風景画等の数多くの作品を残しています。

本展では、倉吉本人から寄贈を受けた資料を選び、戦時の緊急増産体制を支えた倉吉の技と作品の妙をご紹介します。国の「顔」たるお札や切手、諸証券等の製品とともに、印刷局伝統の彫刻技術が生み出すモノクロームの美をぜひご鑑賞ください。

ご利用案内

入館無料

開館時間: 9:30-17:00
休館日: 月曜日(祝日の場合は翌平日)
年末年始、臨時休館日

※やむを得ず開館時間等を変更する場合があります。
詳しくはホームページをご覧ください、電話にてお問い合わせください。



独立行政法人 国立印刷局

お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1-6-1

TEL.03-5390-5194

<https://www.npb.go.jp/ja/museum/>

お札と切手の博物館

検索

交通

JR京浜東北線「王子駅」(中央口)下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」(1番出口)下車 徒歩3分
都電荒川線(東京さくらトラム)「王子駅前」下車 徒歩3分
*駐車場はありません。

常設展

偽造防止技術の歴史—印刷技術・製紙技術
偽造防止技術体験コーナー(休止)
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札/
切手の移り変わり/世界の切手/
国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/
お札の芸術(休止)

*特別展開催時は一部展示の変更があります。



発行: お札と切手の博物館(国立印刷局博物館)

発行日: 令和2年12月1日 ©2020

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。